佳作

僕の気持ち

愛媛県　松山市立西中学校一年　寺村　悠空

皆さんは「吃音」という障害を知っていますか？僕は小学生低学年の頃、吃音という言葉の障害になりました。吃音とは、うまく言葉が喋れない障害です。低学年のころはあまり気にしなかったけれど、高学年になるにつれて、上手く喋れないということが気になり始めました。学校で時々友達から、

「なんでしゃべれんの？」

と聞かれたことがあります。その時は笑って誤魔化していたけれど、心の中では「嫌だなぁ」と思っていました。何よりも苦痛だったのは、音読と発表です。音読は自分の順番が近づくにつれて、緊張感がどんどん増してものすごいプレッシャーに襲われます。心臓がバクバクと鼓動を打つのがはっきりと聞こえそうでした。発表は挙手しない場合も、強制的に当てられることがあり、授業中は常にストレスのかかっている状態でした。それでも毎日学校に行くことができたのは、僕の障害のことを理解し、助けてくれる友達がいたからです。席の近い子が、僕が音読をする前に小声で文章をささやいて発声しやすくしてくれたことがあります。吃音の特性上、一人ではすっと言葉が出ないけれど、一緒に声を出してくれる人がいるとスムーズに話せるのです。そういった恵まれた環境にいながらも、僕の身体は正直でした。

六年生の冬休みが終わる頃、あと三学期を終えたら卒業という時でした。毎回のことではありますが、新学期が始まる前はどういう訳かとても気分が沈んで、何をするにもやる気が起きなくなってしまうのです。僕は初めて「吃音　生きるのがつらい」とこっそり母の携帯で調べました。その夜、そこまで追い詰められていた息子の心情を母が知り、非常にショックを受けていました。その二日後、僕は両親と一緒に車で三時間かけ、吃音の専門医がいる病院を訪ねました。行く前までは、病院に行ったって僕の気持ちなんて分かってもらえないと思っていましたが、先生に会って数分で心を開いている自分に気付きました。仏様のような顔をされた先生は僕の悩みを真剣に聞き、

「心配なんていらんよ。先生も吃音やったんよ。」

と笑いながらさらっと告白されました。重い気持ちで行った僕はあっけにとられた半面、なんとも言えない温かい気持ちになりました。吃音があるがゆえに生きている価値がないとまで思っていた僕に「吃りながらでも、話してみたらええんよ」「生きてるだけで十分すごいんやで」「なんでもチャレンジしてみたらええんよ」等と優しく諭して下さいました。未来に希望の光が灯った瞬間でした。

「吃音」は百パーセント完治するものではないけれど、有害ばかりではないと知った僕。本当はお喋りが大好きな僕。失敗を恐れず自分にしかできないことも必ずあるはずと、興味のあることに挑戦し続けたいです。